

五味川純平
ご み かわ じゆん べい

1916年 満洲に生まれる
東京外語英文科卒
満洲にて就職、応召
1948年 引揚げ
著 書 『人間の條件』『自由との契約』
『歴史の実験』『孤独の賭け』
『アスファルト・ジャングル』
いずれも三一新書
現住所 東京都渋谷区神宮前 1—15—3

戦争と人間 8

定価 300 円

1967 年 4 月 12 日 第 1 版発行

著 者 © 五味川純平
1967 年

発行者 竹 村 一

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電話 東京 (291) 3131 ~ 5 番

振替 東京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 568

戦 争 と 人 間

8

髑 髏 の 舞 踏

第 五 部

五 味 川 純 平 著

三 一 書 房

戦争と人間

髑髏の舞踏

第五部

昭和十一年二月二十六日未明――

夜来の雪は降りしきっていた。三日前の大雪につづいての雪である。新雪は、前の雪が掻かれて積まれて汚れたのを、白々と埋めた。

東京・麴町区南部地域の路上では、闇のなかで雪が踏み荒された。完全軍装の部隊約一千四百名が、首相官邸、陸相官邸、警視庁など、この地域にある日本の軍・政機能の中枢部を襲撃または占拠したのである。

市民は、極く少数の者を除いて、まだ何も知らなかった。

士官学校事件に端を発して免官になった元陸軍一等主計・磯部浅一は、丹生部隊に属して、先発した栗原部隊の後尾から、赤坂溜池を経て首相官邸の坂を登った。そのとき、首相官邸内から数発の銃声が聞えた。栗原部隊の襲撃がはじまったのだ。

磯部は武者ぶるいした。彼はそのときの感じを、獄中遺書『行動記』にこう書いている。

「勇躍する、歓喜する、感慨たとへんにものなした。（中略）とに角言ふに言へぬ程面白い、一度やって見る

といい、余はもう一度やりたい。あの快感は恐らく人生至上のものであらう」

磯部が後尾に参加していた丹生隊が、首相官邸の前を通って陸相官邸に到着したのは、栗原隊の首相官邸襲撃直後だから、午前五時を僅かに過ぎていたところである。

後尾の磯部が陸相官邸に着いたとき、同じ丹生隊で行動した香田大尉と磯部同様免官になった村中が、川島陸軍大臣に面会を求めて警備の憲兵と押問答していた。

磯部は、その間に、官邸周辺の部隊配置を見てまわった。そこへ、鴻之台の田中勝・自動車隊が来て、磯部は、手筈どおり、トラック一台を赤坂離宮前へ走らせた。教育総監・渡辺錠太郎襲撃に使用するためである。

蔵相・高橋是清を襲撃した中島隊が「万歳！」を唱えながら帰って来た。首相官邸からも岡田首相を殺したと報告があった。内大臣・斎藤実襲撃に向った坂井隊から麦屋少尉が来て、目的を達したと報じた。「快報」しきりに至ったのである。

以上は、二・二六事件の主役の一人、磯部浅一の、事件勃発当時の、ほんのいつときの記憶である。

時間を少し前へ戻す。

二月二十六日午前二時三十分ごろ、歩兵第一連隊の栗原安秀中尉は、所属の下士官、見習医官ら約十名を事務室に呼んで、「蹶起趣意書」を読んで聞かせ、昭和維新断行のため総理大臣官邸を襲撃することを告げた。「蹶起趣意書」は、歩兵第三連隊第五中隊の野中大尉が草稿を書き、村中孝次が手を加えたものである。

栗原隊、非常呼集。銃隊全員舎前に整列、蹶起の趣意を聞く。部隊を戦闘単位に編成する。機関銃の一部を第

十一中隊の丹生誠忠中尉の下に配属。

午前四時三十分、栗原は下士官兵約三百名を指揮し、機関銃七・同実包二千数百発、軽機関銃四、小銃百数十・同実包一万数千発、拳銃約二十・同実包二千数百発、発煙筒、防毒面、梯子等を携行して、総理大臣官邸めざして兵營を出発した。

栗原隊が麴町区永田町の首相官邸に到着したのは午前五時ごろである。

栗原は小銃隊を率いて通用門から邸内に侵入し、対馬勝雄中尉（豊橋教導学校）と共に日本問玄閣脇の窓硝子を破壊して屋内へ押し入り、岡田首相の姿を求めた。

林八郎少尉は兵を率いて裏門から侵入した。

この襲撃で、警備の巡查四名が射殺あるいは斬殺され、岡田首相の妹婿で私設秘書官の松尾伝蔵が中庭の一隅で兵隊の小銃射撃によって殺害された。

巡查たちの犠牲的な数十秒間の応戦と、松尾伝蔵の殉難がなければ、岡田首相は助からなかったにちがいない。松尾は、風貌が岡田にやや似ていた。襲撃部隊は、松尾を岡田と誤認したのである。岡田は女中部屋の押入れに隠れ、二十七日夕刻、岡田首相（実は松尾予備役大佐）の弔問客に紛れて、奇蹟的な脱出をする。

午前二時三十分ごろ、歩一第十一中隊では、丹生誠忠中尉が下士官十数名を集め、蹴起趣意書を読み聞かせ、同志将校が一斉に蹴起することを告げた。

午前四時ごろ、非常呼集。兵は昭和維新断行を聞かされ、部署は陸相官邸・参謀本部・陸軍省の周囲を警戒し、出入の制限監視と知らされる。

午前四時三十分、丹生中尉以下約百七十名、機関銃二・実包千発、軽機四、小銃百五十・実包約一万発、拳銃十二・実包二百発を携行して兵營を出発。

午前五時ごろ陸相官邸に到着し、下士官兵は所定位置につく。

村中、磯部、香田大尉（歩兵第一旅団司令部）、竹島継夫中尉（豊橋教導学校）、山本又（予備役少尉）らが随行したのは、この部隊である。

竹島、山本又は、陸相官邸表門で、特定人以外の出入を禁止した。

歩一週番司令・山口一太郎大尉は、前夜来、村中・磯部らの民間同志が来營して栗原中尉に面会を求めたのを許可した。山口は、前日の日夕点呼後、栗原から、「今夜は何事も起こらないから安心してくれ」と云われて、決行を予知していたのである。

週番司令というのは、連隊長以下の營外居住の將校が帰宅したあと、各中隊の週番士官を統率する連隊の最高責任者である。

山口大尉は、午前四時少し前、週番副官、衛兵司令から、機関銃隊が非常呼集を行なっているという報告を受けたが、放っておいた。

つづいて、四時三十分ごろ、栗原隊、丹生隊が完全軍装で出発するのを黙認した。

山口大尉は本庄侍従武官長の女婿で、事件一味が上層部への工作を期待した頼みの綱であった。

午前五時ごろ、襲撃部隊が襲撃目標に到達したところ、本庄侍従武官長は、山口大尉からの使者・伊藤少尉の来訪によって眠りをさました。報告は、歩一の將兵約五百が直接行動のため既に出動したということである。

本庄は直ちに岩佐禄郎憲兵司令官に電話連絡し、さらに宿直侍従武官中島鉄蔵少将に電話してから、参内を急いだ。彼が統帥系統へ連絡をした形跡はない。

歩兵第三連隊では、午前零時三十分ごろ、週番司令・安藤輝三大尉が発行した弾薬庫開扉証によって、連隊弾薬庫が開かれ、小銃実包約三万五千発、軽機実包約一万五千発、重機実包約八千五百発、拳銃実包二千五百発、発煙筒五個等が持ち出され、各中隊弾薬受領者に交付された。

同じころ、機関銃隊週番士官は、週番司令室で、安藤輝三から、相沢公判進行に伴い帝都の情勢逼迫、不穩の徴あり、連隊は一部兵員を残し主力を以て警備に任ずる、機関銃隊週番士官は機関銃隊十六箇分隊を編成し、八箇分隊を野中四郎大尉の部隊に、四箇分隊ずつを安藤輝三、坂井直中尉の各部隊に配属するよう示達された。

機関銃隊の柳下良二中尉は、安藤司令の示達を一応受諾し、地方へ出張中の内堀隊長が帰京しているかもしれないから、その来隊を求めようとして、伝令を隊長の私宅へ飛ばした。伝令は虚しく帰って来た。隊長はまだ帰着していなかったのである。柳下は、やむなく、百六十名をもって十六箇分隊を編成し、午前三時ごろ、安藤の示達どおりに各隊に配属した。

安藤が区処した出動部隊が、二・二六事件の主力部隊だったのである。

坂井直中尉、高橋太郎少尉、麦屋清済少尉、安田優少尉は、歩三第一中隊全員に起床を命じ、第二中隊の一部と配属を受けた機関銃隊の一部と共に、舎前に整列させた。

出動の目的は、雪の降りしきるなか、払暁を期して昭和維新断行のため斎藤内府襲撃にある。

午前四時二十分ごろ、下士官兵約二百名、機関銃四、軽機八、各実包二千数百発ずつ、小銃実包六千発、拳銃

十数挺・同実包約五百発を携行して兵營を出発。

午前五時五十分ごろ、四谷区仲町の齋藤私邸に到着。坂井は兵を率いて表門から、高橋、安田は裏門から侵入し、軽機関銃を乱射して女中部屋の雨戸を破り、屋内に入った。齋藤内府は、坂井、高橋、安田、林武伍長から四十七発の弾丸を射ちこまれ、即死した。

内府を救おうとした妻春子も貫通銃創など全治三週間の傷を負った。

齋藤内府襲撃を終った高橋太郎、安田優の二少尉は、陸軍省方面へ向う坂井部隊の主力と別れて、兵三十名を率い、第二次襲撃に出発した。目標は教育総監・渡辺錠太郎である。

高橋・安田隊は、かねての手筈どおり、田中勝中尉（野戦重砲兵第七連隊）が磯部の指示で赤坂離宮前にまわしておいたトラックに搭乗して、午前六時すぎ、杉並区上荻窪の渡辺総監私邸に到着。軽機で玄関扉を射撃破壊して闖入し、すぐ夫人が制止するのも聞かず、教育総監に対して高橋、安田は拳銃射撃、軽機射手には乱射を命じた。渡辺大將は拳銃で応戦したが、全身に十数カ所の銃創、刀創を受けて絶命した。

歩三では、坂井隊とは同じ午前二時ごろ、野中四郎大尉指揮の下に、常盤稔少尉、清原康平少尉、鈴木金次郎少尉が、第七・第三・第十中隊を非常呼集した。

野中は、これらの隊と、配属を受けた機関銃分隊八箇分隊を合せ、兵力約五百名を指揮、機関銃八・実包四千発、軽機十数挺・実包約一万発、小銃実包約二万発、拳銃数十挺・実包千数百発を携行して出発。目的は警視庁を占拠して警察権の発動を阻止することである。

午前五時ごろ、警視庁前に到着。道路上数個所に機関銃、軽機、小銃分隊を配置して警視庁の各出入口を扼し、三宅坂、虎ノ門、日比谷方面に向う要所に歩哨を立て、警視庁特別警備隊屯所を機関銃、軽機で包囲、屋上に軽機、小銃分隊を配置した。電話交換室にも兵を入れて、外部との通信を阻止しようとしたが、これは成功しなかった。兵隊が交換台や通信機械についての知識に乏しかったからである。電話交換手監督・石田末子はこう述べている。

「午前五時から五分か十分の間に、窓の外の軍隊の様子や、交換台へ感じられてくる通話状態の普通でない空気がなどから考えて『これは只事でない』と思いました。（中略）五時十五分頃からは、警備係から各方面への通話が次第に輻輳して来ました。（中略）そこへ数名の兵隊が入って来て交換の即時停止を命じ、銃剣をもって私達の後に立って監視しているのです。（中略）丁度その頃は通話輻輳を極めている時で、呼出ランプは、どれもこれも点火して交換台一面ランプの灯になる有様でした。……私は『これはうまい』と思って同僚の方々に合図し、灯を消すためとして、接続コードを全部つなぎ、滅火といっしょに、溜っている通話を全部つないでしましました」^{（註一）}

歩三の週番司令・安藤輝三大尉は、先に述べた襲撃準備ののち、自分の中隊・第六中隊の下士官約十名を呼んで、企図を明かした。昭和維新断行のため侍従長・鈴木貫太郎大將を襲うことである。

午前三時ごろ、第六中隊に非常呼集。全員舎前に整列。

午前三時三十分ごろ、機関銃分隊四箇分隊を合せ下士官兵約二百名。重機四・実包二千発、軽機五・実包千数百発、小銃約百三十・実包九千発、拳銃十数挺・実包約五百発を携行して出発。

麴町区三番町の侍従長官邸に到着は午前四時五十分ごろである。

永田曹長に兵の一部を率いさせて裏門から、堂込曹長指揮の一隊は表門から、邸内へ侵入。安藤大尉も表門か

ら入って、鈴木侍従長を探した。

永田、堂込は奥八畳の間で鈴木侍従長を発見、拳銃を発射して胸、頭、臀などに重傷を負わせた。そこへ安藤が来て止めを刺そうとしたが、妻孝子の必死の嘆願に動かされて、思いとどまった。これで鈴木貫太郎は生きながらえ、九年後に戦時下最後の内閣の首班となるのである。

安藤隊は五時三十分退去、三宅坂へ向う。

安藤は、二年前に鈴木を訪ね、革新政策について意見を求め、鈴木に説得されて帰ったことがある。踏みこむときに堂込・永田を先に立てたのも、止めを刺すの思いとどまったのも、前のそのいきさつが影響していたのかもしれない。

近衛歩兵第三連隊では、中橋基明中尉が第七中隊に非常呼集をかけ、全員を舎前に整列させ、明治神宮参拝と称して下士官兵約百二十名を指揮、軽機四、小銃約百挺・実包千数百発、拳銃数挺・同実包約百発を携行して、午前四時三十分ごろ兵営を出発した。

出発後、途中で、中橋は部隊に高橋是清蔵相襲撃の意図を明らかにし、実包を分配、装填させた。

中橋隊の今泉義道少尉は、襲撃に先立つ午前三時ごろ、中橋中尉と中島莞爾少尉（陸軍砲工学校）から高橋蔵相殺害を打ちあけられ、行動を共にすることを求められた際には、態度を明らかにしなかった。中橋は「我々と行動を共にすると否とは自由に委す。但し騒起後は当然守衛隊控兵（宮城守衛）の派遣あるべきを予想せらるるが故に、控兵副司令たる貴官は唯控兵を引率せよ」と申渡した。

今泉が中橋と行動を共にするようになったのは、迷ったあげくである。直属上官の中橋中尉と敵対関係に立ち

たくなかったにちがいない。

中橋は、赤坂表町シャム公使館付近に今泉の率いる守衛隊控兵を待機させ、午前五時ごろ、表町三丁目の高橋蔵相私邸に達した。

邸前、電車道路に軽機関銃を配置し、憲兵や警官の出動に備え、中橋中尉は表門から、中島少尉は塀を乗越えて屋敷内に入り、内玄関の扉を破壊して屋敷内に侵入。

高橋蔵相は二階十畳の間に寝ていた。彼は逃げも隠れもしなかった。中橋は掛蒲団をはねのけ、寝たままの高橋めがけて、「天誅！」と叫びながら、拳銃数弾を発射。中島は軍刀で高橋の肩口に斬りつけ、さらに胸を突き刺した。

高橋蔵相殺害ののち、午前六時ごろ、中橋は今泉少尉以下の守衛隊控兵を率いて、宮城半蔵門に至り、立番中の皇居警守に対して、非常事件が発生したので正門の控兵が来たと今泉に云わせて、開門させ、宮城内に入った。叛乱軍で宮城内に入ったのは、中橋隊だけである。

中橋は、守衛隊司令官・門間健太郎に、明治神宮参拝の途中突発事件に遭遇し、非常事態と認めたので応援に来たと称して坂下門の警備に当ることを申出、坂下門で参内者を監視していたが、長くはつづかなかった。守衛隊司令官が次第に疑いはじめているのを察知して、午前八時ごろ、宮城正門からひそかに単独で脱出したのである。

今泉の方は、司令官に何も打ちあけず、十一時ごろ、勤務の交代を命ぜられて連隊へ帰っている。

前夜来、栗原隊に集合した河野寿・航空兵大尉（所沢）、宇治野時参軍曹（歩一第六中隊）、黒沢鶴一一等兵